



支配からの自由

Free from Control

永田 円了

「火事場の馬鹿力」というコトバがある。火事するとき、自分にはあると思えないような大きな力を出して、重いものを持ち上げたりすることから、切迫した状況に置かれると、人間は普段には想像もできない力を無意識に出すことの例えである。ではなぜ自分でも想像できない馬鹿力が出せるのだろうか。それは、自らを抑制している“認識”を一時的にははずすことができているからである。目の前に30メートルの高い崖があり、その崖を登れるか登れないかは、実際に登って見ないと分からない。しかし登る前からできないと思う認識があることで、実際に行動したりしなかったり、力の発揮度合いが調整される。

自分を忘れる

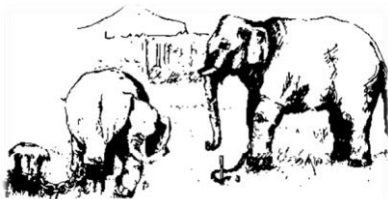
ある時、真国寺の下を流れる用水で事故が起きた。老夫婦が運転する車がこの用水に飛び込んだのである。ブレーキとアクセルを踏み間違え、柵を壊してジャンプした。5月の田植え時期で、幅10メートル近くもある用水は、水量も多く流れも速かった。用水に浮かんだ乗用車は、老夫婦を乗せ少しづつ沈みながら流されてゆく。

当時お寺には、アルバイトに来ていた中国人留学生の劉くんがいた。彼は、目の前の光景にとっさに反応して用水に飛び込む。半分ほど沈んだ車のドアはなかなか開かない。水深は2メートル、懸命にフロントドアをこじ開けようとするが水圧でたやすくは開かない。中にいる老夫婦はパニック状態、流される速度も増し、車もどんどん沈んでいく。劉くん、全身の力を振り絞ってドアノブに両手をかけ、両足でボンネットの側面を蹴った。その反動でドアにすこし隙間があいた。水が車内に流れ込む。劉くんの手が老夫婦の服をつかんだ。危機一髪、二人は助かった。

衣服がびしょびしょで震えている劉くんから事故の話聞いてびっくりした。何より驚いたのは、水が怖く、まったく泳げない彼がが、自ら用水に飛び込んだということである。彼自身も、自分がやったことを振り返り、震えている。寒くて震えているのではなく、怖くて震えているのである。彼のとった行動は、

「自分は泳げない」という自分を忘れて、川に飛び込んだのであった。

なにか事が目の前で起こる。その場面には思考認識はない。ただ自分のすべきことをする。そこにはなんの迷いも躊躇もない。前をみて、スーッと行動する。心を縛る“支配”からの自由があったのである。



自分を縛るもの

サーカスの象の話がある。体重4トンもの象、小さな杭に細い鎖でつながれている。今にも切れそうな鎖、にも拘らず巨体象は逃げる事ができない。何故か？ 象が生まれたばかりの時に、頑丈な杭に太い鎖でつながれる。象が成長するにしたがって、杭と鎖を小さく細くするが、象の頭には頑丈な杭と太い鎖が“刷り込み”されていて、逃げる事ができない。これは、たんなる象の話だ、と笑い飛ばせるだろうか。実は私たち人間の頭のメカニズムも、同じように働いているのである。

<事例 DVD等>

大河ドラマ「べらぼう」、自由に生きるとは、
平賀源内／江戸時代の学者、日本のレオナルド・ダビンチ
中国人留学生・劉くん、“自分を忘れて”の人命救助
「私は支配されていた」Eテレ ハートネット特集 2024/10/28
妻を支配する夫 映画「ゴッドファーザーII」より
「私のリカバリー 魂の解放を求めて」杉本彩 Eテレ 2024/12/17
「依存」と「自立」の隙間から、米映画「かごの中の瞳」
歌・今井 美樹「瞳がほほえむから」

円了のホームページ：www.enryo.jp



杉本彩